関西・信越

鳥取京都・合掌和合

それから西下して山陰道ご巡教。十月五日から一週間、鳥取市無量光寺にて授戒会、次に同市真教寺にて五日間寺院方中心のご講話あり、十七日夕方京都着、恒村氏方にご少憩後、知恩院勢至堂に登り、十月十八日より五日間の京都光明会主催別時三昧会ご指導。宗祖の道詠につきご法話があった。

上人「右手左手、左右反対の指を合掌すれば、親指は親指と重なり小指はこんなに小指と合います。調和の道は意見の合わぬ両方が如来様に合掌するのですね」。

京都から四、五名の随行者を伴ってご東上。車中、随行の佐々木師が「お弁当を買いましょうか」とお尋ねすれば、上人「もう直き静岡です。静岡に着くと鯛飯が買えます。それを買うと五銭安くなりますから、それに致しましょう」。

車中のお食事にいつもお茶を飲まれない。しかし今度は京都からの随行者に気の毒に思って佐々木師が「お茶はどうしましょうか」とお尋ねすれば、

上人「一度や二度、お茶を飲まずにしんぼうできるようにならなければ駄目です」。

十月二十三日は神奈川慶運寺、二十四日より当麻無量光寺で三日間の十夜法要を執行された。

それから十月二十七日、信州上諏訪正願寺ご巡教。ご法話がすむと夕刻五時過ぎの汽車で、越後に向けご出発になった。

信濃越後

大正９年10月京都知恩院勢至堂別行の時

帰依渇仰の思い深き飯田せい子夫人は、年来敬慕に堪えぬ上人のお別れがことの外悲しく、せめての心づくしに夕餉のお仕度をしていると、上人「今頂きますと腹工合が悪うございますからお弁当にして下さい。それもおムスビにして中にお漬けものを入れ、外を海苔で巻いていただけば誠に結構です」。

駅でも信者たちに最後の一瞬までご説法。しばらく汽車を乗ってから、例の大きなおむすびを随行二人とともに召し上るに、大きくて食べきれないのを、「これはあすの朝の分に残しておきましょう」と、丁寧に残りをおしまいになった。それから「おつとめを致しましょう」と随行者をうながして衆人環視の中に、しずかに礼拝儀をあげられし後、ご法話があり、ともどもに小声で聖歌を歌われた。列車は長野止りで、プラットホームにある待合所に入られたが、高原信州の寒風が破れたガラス戸から凄い音をたてて吹きこむので、夜がだんだん遅くなると、身をきられるような寒さであったが、待った十時の不定期列車はこなかった。

寒駅の夜

その中に一人の爺さんがあって、いきなりそばの上人に向い、「汽車もないのに時間表にはチャント連絡するように書いてあるのは実にけしからんじゃありませんか」という。上人はもの柔かに「それは不定期ですから」とおなだめになる。老人は不定期が解らず正に上人のせいでもあるような口振り。その内に爺さんの話が変わり「時に貴方がたはお坊さんだから一寸お尋ねしますが、越後の柏崎弁栄上人という偉いお坊さんを知ってござらぬか」と問う。そばから随行者が「このお方がその弁栄上人ですよ」というと、老人は驚きのあまり「ヒエー」といいながらコンクリートの上に土下座して不礼を謝した。

他の旅客は散り去って、あとには上人と随行だけ残された。いたし方なく翌朝一番まで待つことに決し、あまりに寒さが厳しいので駅の本屋にある待合室に移った。しかしそこは三方が明け放しなので風は吹き通しとなり、あちらよりなおさら寒い。その時上人のお顔色が悪いのに気がつき、ハット驚き随行の佐々木師は、「上人、どうかなさいましたか」と伺うと、「いや、これから恒村さんから貰ってきた薬を飲もうと思いますが、その辺に水はないでしょうか」と仰せられる。あたりを探したが、相憎水呑所さえない。仕方なく上人は便所の水道栓に行かれてわづかに落つる水を手に掬われ、お薬を召し上がられた。

その内夜が更け行くにしたがって寒さはますます厳しく、汽車の時間までにはまだよほどの時間がある。その時随行者は思案にくれながら不図駅前を見ると、向うに赤い提灯にそばと書いてあるのが眼にとまった。上人も気がつかれたと見えて「あれはそば屋ですね、信州は蕎麦が名物だそうですね、一つとってきてはいかがですか」。随行の佐々木師は渡りに舟と早速そば屋に飛んで行きそのまま引返して来て上人に、「いま手がないので持って行けぬと申しますから、ご一緒に食べに参りましょう」と申し上げると、「それでは止しましょう、あなた方行っていらっしゃい。私はここで待っていますから」。上人をさしおいても行けず、師らもそのままそこのベンチに腰を

おろして時を過した。夜は更けてあたり静けくなるにつれ寒さはいや増すばかり、まだ夜あけまではほど遠いので、上人は随行の毛布をお掛けになり冷き駅の板の上へ身を横たえられた。

痛わしや衆生教化の旅に櫛風沐雨四十年、おん身の休まる暇とてもなく、田舎の小駅の夜を強き風を防ぐそなえもないので、身を切る寒風の老のおん身をなぶるに任せ、冷えきった板の床はお伴の若き人々でさえ堪えがたいのに、上人はなんのお患いの様もなく、文庫を枕にただすやすやと眠入られるご様子。随行の一人は上人の枕辺に、一人はお足下に坐り、せめては少しなりとも寒風のあたらぬよう人屏風を造った。

ややしばらくして上人は「あなた方は寒いでしょうからそばを食べていらっしゃい」ご親切にいって下さる。もったいないと思いながらも、上人をおいたまま、そば屋へ飛びこんだ侍者は再び引き返し「お上人様いらっしゃいまし」と頻りに申し上げるが、「いいえ私はよろしい」とお出でにならない。そこで初めて気がつき蕎麦を運んできて差上げると「ああ、ありがたい、ありがたい」と大変お喜びであった。

しかし寒風はますます募るばかりで、上人はふるえていらっしゃるので「向うの五明館という宿屋へ参り、しばし寒さをお凌ぎ遊ばしては」と申し上げると、「いいえ行きますまい。あ

の家は私が知っているので、今頃行けばきっと迷惑するでしょう。あな方もう少しですからご辛棒なさいね」と、やさしくかえって随行の二人をおいたわり下さる。

その時、師は上人から可なりの金額のお金をお預かりしていて、宿屋へ行くくらいはなんでもなかったのであるが、上人は信者の尊い布施を一銭たりとも自分に楽をするためにはお遣いにならない。とかくする間にようやく朝の三時の列車がきて、越後へ向けて出発された。

越後新発田の大善寺で五日間のご授戒。この間新発田の一青年の依頼で十二光仏を十二枚にかき上げられた。

それから村上に二日間、次に中条の渡辺庄輔氏宅ご結縁があった。

そのころ上人は日夜の伝道に大変ご疲労になり、お風呂に召されては、

上人「如来様のお身体をこんなに無理にお使い申してすみません、ほんとにもったいない、もったいない」

とお身体をさすっておいでになった。にもかかわらず、松戸の「ミオヤのひかり」からも、また京都の「光明」からも原稿を書いて下さいとせがんでくるのに、ご疲労の上人は夜を徹してお心こめし慈悲の雫を末代かけての御訓(みおしえ)にお認めになった。

そしてこれが創刊後丁度一ケ年をへた九年十一月号のミオヤのひかり誌に載った、最後のご文章となるのであった。その一節に、

「大ミオヤなる如来は、われら一切衆生の心霊をうるわしく染めなされんがために、清浄、歓喜、智慧、不断の光明をもってとこしえに照し給うも、われらはその霊光中にありながら、ただ世の五塵六欲に、眼に耳に染汚(けが)されて、いく年月をへても、弥陀の霊光に浄化せらるるの光栄をなすことあたわで、くる秋もくる秋も空しく過し、再び得難き今日をいたずらに暮し行くこと、実に慚恥に耐えざる所……、弥陀は霊光赫々としてわれらが心霊を照し給う。我(われ)らは聖名(みな)を称えて聖旨(みむね)の現われを仰ぎ、霊光に触れて初めて霊に活きることを得ん。しかしてのち霊化の光栄を身に口に現わすようになって、ミオヤの聖寵(みめぐみ)に報い奉る」

続いて新潟善導寺に五重相伝ご勧誡一週間。受者に対して巻物代りに、名残りゆかしき上人のご手蹟をとどめた色紙を一々賜わった。次に長岡法蔵寺お別時ご指導。夜は金井氏、羽賀氏ら二、三の家庭でもご法話あり、いつも在家布教を喜ばれた。お別時が終ってからも、ご出発の予定を一日延ばして、慕う市内の信者たちに結縁の書画を多数に書き与えられし中、篤信者若菜氏にはお願いもしないのにわざわざ釈尊最後の遺教経の一節を、大森氏には宗祖ご遺訓を

染筆　三昧仏

恵まれた。常の教えに

上人「最早この身は終なき寿の中の生命ぞと、悦び勇みて日々に日に、聖き御旨を畏みて常に感謝の心もて、命せの職を励まなむ」。

大正九年十一月十六日より柏崎極楽寺別時念仏三昧会ご指導。

朝お着きになったが、どうもお顔色がお悪いのでおたづねすれば、上人「長岡の信者の方が、流行性感冒の予防注射をして下さると親切にいって下さるのでして貰いましたが、その反応熱のためでしょう」と仰せられて、十時半頃道場に入り念仏しばらくの後、ご法話があった。お念仏がすんでお居間に入られた上人は、どうもお寒むそうでお元気がない。そこへ柏崎のある方が石碑の文字を書いて下さいと頼みに来た。お侍の人はご病

気中に石碑までとハラハラする。と、おつらい中をおいといなく上人はこれを書いて下さった。

午後また一同ご法話、夜も念仏後、三身の聖歌について八相応化のお話をして下さった。終って讃歌を歌う間、広い本堂で寒そうにお法衣の袖をかき合わせながら、それでも嬉しそうに、一同とともに歌っておいでになった。十七日朝五時半、ご入場中で一度ご休息、ご昼食後お伏せりになり、十八日朝は合図の鐘に床の上にお坐りになってなんだか大儀そうである。随行の佐々木師がお願いしてヤット休んで戴き、道場は佐々木師が代理を勤めた。所がお熱は三十九度近くもある。一同大いに驚いた。十九日はお熱が三十九度一分までも昇り、土地の医師籠島氏もどうも診断に苦しむとの事であった。

このお別時後引続いて金沢、および高岡にご化導の予定であったので、佐々木師は「お断りしましょうか」とご相談申すと、上人は「いいや伝道を断ってはならぬ」と仰せられる。「でもお上人はお行きになれないでしょう」と申すと、「私はゆけないが先方が折角準備をしていて下さるのだから、あなたが行かれたらよいではないか」と仰せられた。そこで電報で交渉し佐々木師が金沢、高岡に行くこととなった。

二十日お熱も三十七度五分。丁度結願のことでもあり、別時結衆にお十念を授けて戴くこと

になった。午前十一時頃一同次の室まで参ると、思いもかけず上人は床の上に袈裟衣を召してチャンと坐っていられる。一同感激の内にお十念を受けて直ぐ立とうとすると、今度はご説法を始められた。お熱のある苦しいなか、ご自分のお苦しみは一切忘れてしまって、常と変らぬお気色でご説法下さる。午後にはお熱は三十九度三分にも昇っていた。この日、別時も結願となったので、結衆はそれぞれ引きとり寺も静になった。

二十一日朝はお熱も三十七度五六分、長岡病院の若菜先生も見えた。土地の医師籠島先生はチブスではないかとの疑いから試験をすることになった。しかるに夕方近くなってまたまたお熱が昇りはじめ、三十九度二三分にもなった。この日、本山の加行僧の一人から上人に蓮社号と誉号とを戴きたいとの手紙が参った。その返事に谷氏が代書の理由として上人ご病気でご執筆不可能のためと書くと、上人はそんなことをいってやっては心配させるから、一寸所用で忙しいゆえ代書すると書けとさしづされた。

二十二日。お熱三十八度六分、お食欲がほとんどなく、三度のお食事に召上るわずか一本づつの牛乳を少しお残しになり、その夜もやはりお苦しみで安眠できないご様子であった。上人はご病気が治り次第、引き続いて伝道においでになるお積りか、二十八日からの越前新保円海

寺の五重、十二月六日よりの明石光明寺の教区講習会の方はまだ断らずにあったのを、二十三日にいたりそれぞれ代理の師を指名して都合を尋ね、お断りの手紙を谷氏にご口授になり、お熱三十九度近くのお苦しい気息の中から休み休み仰せられた。

傍で拝すると随分お苦しそうで、時々おうめきになることさえあった。それでも上人はご自分では苦しいということを仰言らない。時に誰かがお伺いすると、わずかにお肯きになるばかりで「病気の苦しみは苦しみとして、如来様のありがたいお慈悲はいかなる場合にも輝いている」と後になって仰せられた。

二十四日。チブス検査の結果は多分そうでなかろうとのことであった。この日午後京都から篤信の医師恒村先生がお見舞に見え（最後までつききりでご診療申し上げることになった）、恒村氏は委しく診察申しあげると迫れる呼吸、はやい脈、高い熱にこれは重大だと感じ、その頃インフルエンザが大流行の折で当時の経験から肺炎ではないかと思った。とにかく絶対安静を願い強心剤をご注射申しあげた。それまでは上人は傍の人のお止め申すにもかかわらず、両便もみづからお立ちなされていた。二十五日はお熱は相変らず高かったが、今朝はよほど楽になったと仰せられた。しかしほとんど食物がおさまらず、冷水の外ほとんどなにも召し上がらなかった。午後

は再び熱が昇りお脈もよろしくない。再び強心剤をご注射申し上げると、注射のあとはしばらく脈もよくすやすやとお休みになるようであった。しかしお口はいたく乾き、お舌は厚い舌苔が覆うていて、お言葉ももつれがちである。お呼吸の迫れる具合からしてご胸苦の様もさこそとお察し申しあげた。この場合、普通の人ならば身体は痛む、胸は苦しい足は倦くなる、しばらくも静臥していられず転々反側するのが常であるのに、いつもご最後までもずっと仰臥してお足をそろえて立てられたまま、微動だもされなかった。夜十一時頃看護していた原吉郎氏たちに百万遍をくるようにと仰った。それで一同一時間ばかり一心に百万遍をくると、もうよいと仰った。

二十六日はよほどお気分がよろしくみづから進んでオモユを少し召し上がり、昼食には牛乳も少し召し上がり、午後になってもお熱は三十八度の上には昇らなかった。これが続けば大丈夫と喜んで「上人様、今後は十分ご静養下さいますように」と申し上ぐれば、「もし幸によくなったら、しばらく静養して著述をしたい」など物語られた。

しかし、突然十一時頃になって恒村医師がご病室からただならぬ気色でてきて、丁度来合わせていた籠島医師になにか耳打ちをして一緒に病室へ入って行かれた。一同ただごとならず思っていると、今度は極楽寺の奥さんが真青な顔をして胸を押えて息も切れそうになって茶の

間へのめりこんで来た。声を立てまいと座蒲団を喰えて泣いているのを、一同でようやくなだめて様子を聞くと「血が！血が！」という。一同茫然とした。この血便が出たのに一時びっくりしたが幸にその後ことなきを得た。そうしてこの自然瀉血のためご胸苦も薄らぎ、絶えず上人をお苦しめ申した**呕**気、**呕**吐もよほど鎮まりて、かえって結果はよいように思われた。この時上人は「今までどうもお腹の工合が悪くて困るから観音様の灌頂の水で洗濯をして戴いたら、さぞ気持がよかろうと思っていたが、丁度その通りになった」と嬉しげに仰せられた。

二十七日は引き続きお気分よろしく、医師が腸鎮静のため阿片剤を用いたためか、一時的にも病苦が薄らぎ、始終ご機嫌よくお見舞の信者たちに談笑のお声さえ漏れた。平生上人のお身体には麻酔剤が少しも入っていないせいか阿片剤がよくきいて、ご興奮の模様があった。上人は障子をあけさせ、懐かしげに庭をご覧になる。風がないだ静かな午後である。小鳥が声もなく庭木の間に餌をあさっている。

この日の午後当りからは常に喜ばし気な笑顔をもらされ、お口にせられる事はただありがたい如来様のお慈悲ばかり、ある時は「仏智不思議、仏智不思議」と感にたえたように仰せられ、またある時は「如来様のお慈悲は宇宙に遍満して……」と仰って、自分の心はスッカリ如来様

の中へ溶けこんでしまって、話をしようにも言葉にならないという意味のことを仰せられた。そして手真似でお慈悲の中に溶け込んだ態を示され、また手拍子をお打ちになって、なにか口の中でお歌いになり、歓喜の状態をお示しになった。

夜に入っても引続き始終なにかお歌いになり、喜ばし気に節廻しも面白く、詩吟ようなことをなさったりしていられたのが、夜中の十二時頃になって、急に「今が断末魔である」と仰せられた。そしてしばらくするとまた突然虚空に向っていくたびか礼拝せられ、「ああついに復活した。断末魔の苦しみがこんなに楽なとはありがたい」と仰せられた。その後も心の底からこみあげてくる嬉しさを、そのままになにごとかをお歌いになっていられるようなご様子であったが、よく承るといく度となく「本覚真如の都より」という言葉をお繰返しになっていられた。それから時々「アアアア」とうめくように仰せられるので、看護婦が「お苦しゅうございますか」とお伺いすると、「いえ、ありがたいのです」と仰った。そしてなるべく触らないでそのままソットして置いてくれと仰って、ご自分で愉快気にいろいろのことを（例えば両手を延して大きく円を画くなど）しておいでになった。時にはまた、お手で虚空をお指しになって、ご自分の額や眼や口をお指しになった。明方の四時近くまでそんな風にしておいでになったが、

それから温和しくなり安らかにお寝りになった。

二十八日、オモユと野菜スープと牛乳とを少しずつ召し上がった。そして相変らず例の嬉し気な笑顔をせられ。神は宗教哲学の瞑想の中に入っている旨をおもらしになった。午前十時頃、合掌していく度か虚空を礼拝せられ、無礙光如来がお出ましになったと仰せられた。そして常にありがたい、ありがたいと仰っては、人を見るといろいろのお説法をお聞かせになった。

上人「今度の病気は丁度一年間、如来様からご説法を聞いたと同様で、まことにありがたいことである。この病気で苦しい思いをしたお陰で、平常の時間がどれほど大切なものであるかを知らして戴いた。平常壮健の時にウカウカと過していたことが、誠にもったいなく思われる」。

「一切の悲哀も、苦痛も、みな如来の恩寵である。今それを如実に経験した」。

また「病気は病気としていくら苦しくとも、如来の慈悲はいかなる場合にもみちみちている」。ある時はまた静かに「薪のある間は火はつきぬ。自分の病気も焼けるもののある間は仕方がない」と仰せあった。夕方近く「もうこれで病気の苦しみともお別れである。なんだか名残り惜しいような気もする」と仰った。

二十九日は引続きお楽で各国よりお見舞にくる人を見るとよくお話をせられ、「平等性の海

に融合している」などと告げられた。

しかるに俄然ご容態は急変し始めた。お熱は上りお脈搏は弱って、一日二回の注射では追いつかなくなった。ご疲労は次第に加わって、苦しいお息の間からうわごとがでる、それもご説法のお言葉ばかりである。お舌がいたく乾ききっているためにお言葉がよく判らないが、恒村氏が枕元に耳をつけておきした時、

上人「如来は……いつもましますけれども……衆生は知らない……それを知らせに来たのが……弁栄である」。

尿量は減少して蛋白の多量を混じ、ご顔面は紅潮して明かに尿毒症と推した主治三医師は、食塩水を注射申し上げたが結果は思わしくなかった。

三十日になってもお熱は引続き高く、息づかいもお苦しそうである。この夜新潟市の医学専門学校長沢田博士を招聘して診断を仰いだ。その結果は主治の三医と同様で心臓と胃腸とことに腎臓が非常にお悪い、それにご老体のことでもあるし、大概はむつかしいようなお話しであった。

十二月一日、早朝沢田博士来診あり。ご病症は一進一退の模様ながらなかなかに望みとてはないが、誰も誰も上人のおそばにいれば大丈夫だという頼もしい感が起る。おそばを離るれば

実に淋しさやるせなさが襲うて来る。たまらなくなっておそばに行けば上人はやや上気したようなご血色で、ただすやすやとお休みになっていられる。お息の苦しささこそと拝しながら、そこには平和な気分が旺溢している。実に不可思議の気分であった。

夜に再び食塩水をご注射申し上げた時「不自然の治療などしない方がよいですね」と仰せられた。それでも身体は医師に任せておられた。注射中にも「歓喜踴躍して善心生ぜんですね」と。お痛わしさにハラハラしている傍らの婦人たちに、かえってお慰めの言葉を賜りなどした。お見舞の人々が徹夜してご看護申し上げようとすると、「私には、一人だけついていて下されば十分ですから、どうぞお休み下さい、眠るということは、明日の活動の準備として如来様より与えられた尊い物です」といつもの通りのやさしいいつくしみのお言葉であった。

毎日雨ばかりで室内うす暗く、連日の高熱と不眠不食にめっきりご衰弱の事とて、お姿がいたたしい。遠方から毎日毎日引き続きくるお見舞の信者など、一目拝しては涙にくれて隣室に退いて忍び泣きに泣伏する人もある。この二三日以来「無碍光如来がまします」と仰せられては空を見つめて礼拝し給うこともあり、あるいは歓喜のお面持にてじっと空を見つめらるることもあった。

脈搏も呼吸もいよいよ険悪となり、最早引っきりなしにご注射申し上げる医師の方が身をき

るようにつらくなった。午後「如来様が早くこいと仰せらるるゆえ、治療はしないように」と仰せあり、ご危篤の電報は引き続き打たれた。

一日夜十一時過ぎ頃、極楽寺籠島夫人および原吉郎氏夫妻ご看護申し上げている時、ご病苦の中よりポツポツありがたきお話があり、みなの手を交わる交わる握って、「いつまでも離れない、死んでも離れはせぬ」と仰せられ、

また「如来は一切を生育し給う。その中にやすらかに休ませて頂くわれは誠に幸福である。前の林でも、向うの山でも、峯の松風でも、谷の響でも、皆ことごとく如来のなさしめ給い、如来の赫々たる大光明に照らされてあるのであるから、その中へ身も、心も全く投げ入れて、至心にお念仏を申せば、自然に如来の聖意とわが心とが融合一致する。これを善導大師は無為三昧楽と仰せられた」とお聞かせになった。

十二月二日、お熱は前日に引き続き高く息づかいもお苦しそうであった。しかしお顔の色は非常によかったが、いつものように夜はご病勢がつのってきて、丁度九時ごろ看護婦が驚いてお息づかいが変だといってきたので、一同あるいはとご病室に集り上人をとり囲んだが、上人は案外おたしかで、やがて二十分もたつと、もうよいからあちらへ行って寝るようにと仰せあった。そ

の後夜明けまでに二度またそうしたことがあった。床の間にはいつもの例の通りご来錫前から来迎仏がお掛け申してあり、さらに室の中央には上人ご染筆の三昧仏尊像をお掛け申した。

三日、到底ご回復おぼつかなしとのことで方々へご危篤の電報を打った。電報によって各地から多数の人がお見舞に見えた。するとお言葉がわからぬながらも一々にご挨拶のご様子をなさる午後ご胸苦がやわらぎはしないかと医師は水蛭を心臓部におしつけ申した。その後しばらくは呼吸もお楽のようであった。

その時、上人は合掌して「願わくばこの功徳をもって平等一切に施し」と、総回向の文を力強い、実にはっきりしたお言葉で三度まで唱えられた。

午後三時ごろ、しばらく隣室に退いてお見舞の方々とお話していた恒村氏は、上人のお召しで急いで参った時「上人様、光明会のことはご心配遊ばしませぬように。およばずながら私ども一同力を合わせて、意志を継承致しますから」と申し上げた。すると上人のお眼は輝き合掌されて「どうぞ、どうぞ」と仰せられた。

お弟子の弁誠師、上人の何事か物いわんとさるるご様子を看取して、お床にすりよって、耳をお口の所へあてて承れば「如来様に背を向けている、そうしてはならぬ」との仰せを聞いて

気がついて見ると、上人のお顔をみまもるため師は尊像の前に坐り尊像に背をむけていた。上人再び師を呼びよせられ、「如来には人智で測り知るのことできぬ大威力がある。よくそのお力にお縋りして励めば、どんなことでもできないことはない。おまえもお鎚り申して道のために努めてくれ」と仰せられた。またある人には「初一念を貫け」とお訓え下さった。

三日夜に入ればいよいよご危篤に陥らせ給う。お脈は糸のごとくかすかに、お息も絶え絶えである。午後八時頃からいよいよこれが最後かと思われ、各国から馳せ参じた道俗一同ご病室に集って、同寺住職籠島順故師の打つゆるやかな引磬（いんきん）の音につれて、低音に声を引いて称名していた。すると上人は蒲団から手をお出しになって、なにかいいたげな手真似で拍子をとらる。（その時にはもうお舌が痙（ひきつ）ってしまって、お言葉がほとんどわからなかった）それで木魚をもってくると、おうなづきになる。お手の動くままに前よりずっと速（はや）調子に称名を続けた。上人は手に定印を組みともどもに念仏せられた。

しばらくすると上人は急に虚空を見つめられ、礼拝されるご様子であったが、もつれる舌のお声でなにか偈文を三度までお唱えになった。その偈文は人によっては、

弥陀身心遍法界　衆生念仏々還念

一心専念能所亡　　果満覚王独了々（三昧発得偈）

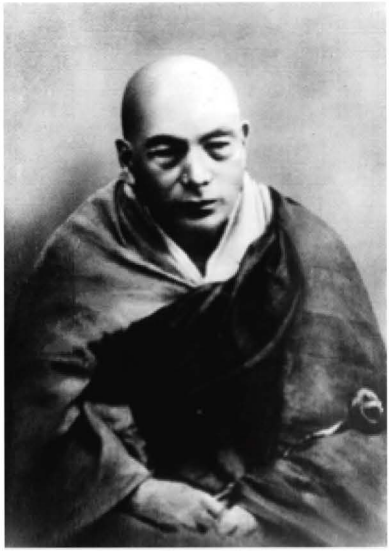
と聞きとられたし、また近くお側に侍っていた多年常侍の大谷仙界師には、このもつれるお舌の聞きとれなかったお声の偈文は「弥陀身心」の偈ではなく確かに、

敬礼天人大覚尊　　恒沙福智皆円満
因円果満成正覚　　住寿凝然無去来

の偈文に聞きとれた。

それが終ってお十念をなされ一同同声に拝受し、あっちへ行ってやすめと仰せられたので、一同は退き下がった。それからその夜、医師としても今こそご臨終と思うことが二度もあり、息づまる思いで集りし一同は、上人の平和な平和なお顔を拝して、また退き下がった。

大正九年十二月四日。戸外は凄い風雨の中に夜はあけはなれた。午前五時過ぎ、上人はお弟子に命じて木蘭のお袈裟を蒲団の上からかけさせられた。遠近各国から集った多くの道俗に廻らぬお舌でなにごとか聞きとりにくかったが、長々とお説法があった。それからお眼は虚空を端視して動かず、（左右のものに如来現前し給うかと拝察された）上足大谷師はしずしずと木魚を打ち出し道俗一同、おとこの側にも、次の間にも端坐して荘厳な霊気につつまれつつ念仏



した。

折しも一番列車で関東の信者衆が馳けつけた。と、

上人は御かんばせ常よりも輝き、かすかなれども深い声で、ナーム（一息）アーミ（一息）ダーブ（一息）ナーム　アーミ　ダーブとくりかえしお唱えになった、おん息は絶え、ご相好さらに一段の荘厳を加えておん眼は永久に閉じられた。（時に午前六時五分。）

＊　＊　＊

七日しんしんと降りしきる雪の柏崎、極楽寺にてご密葬執行、お棺のお伴する二百数十名の道俗の中には、跣足で雪を踏みせめてもの心をのべし人もあった。御荼毘に付し、ご遺骨は柏

崎、五香、当麻、京都の四ケ所にお分け申した。

如来大智慧大慈悲を三業念仏に実現しすきなく光るあとを残し、来よこの道と示してぞ、影を吹雪にひそめましぬ。荼毘の煙は消えぬれど去らず来らず、常住に済度ひまなく照り給う、なお照り給う極楽無為涅槃界。輝く永遠のみいのちは、ミオヤの道をゆく人に光めぐまん、霊応常に新たならむ。

されども光しみる涙、乳房さがして児らは慕う。われらを、われを、このわれひとりを救わんための艱難辛苦、六十二年の越しかたのみあと思えば、あのみあと思えば。

（終）

日本の光（弁栄上人伝）

昭和11年９月11日　第１版
昭和44年１月15日　第３版
昭和52年６月15日　第４版
平成９年２月15日　第５版 改訂
平成16年12月４日　第６版

複製自由
〔非売品〕

著　者　田中木叉
発行者　鶴山瑞教
印刷所　㈲藝林美術出版社
京都市右京区龍安寺住吉町21

発行所　財団法人 光明修養会
〒873-0401 大分県東国東郡武蔵町池ノ内1708
TEL. 0978-68-0039